

長野県革新懇ニュース

2017年11月号
発行日11月10日
会費 2,000円
購読料 3,000円(送料込)
振替 0510-3-15971

221

発行 日本と信州の明日をひらく県民懇話会
(長野県革新懇) 発行人: 山口光昭 編集長: 高村裕
〒380-8790 長野市県町593 高校教育会館内
TEL: 026-234-1231 FAX: 026-234-2219 メール: mail@nagano-kakushinkon.com

====今号の主な記事====

- 1面 小岩井カリナさん、良馬さんのインタビュー
- 2面 1面続き、近現代信州の歴史回廊
- 3面 「歴史認識と東アジアの平和」フォーラムに参加して
佐久で「市民と野党の共闘をさらに進める」つどい
- 4面 随筆「ノーベル平和賞と『二人のイーダ』」堀井正子さん
映画評論「トランポ」
読者のこえ・各地の動き、クロスワードパズル

長野県革新懇

検索



左が姉のカリナさん、右が弟の良馬さん。
カリナさん：1972年生まれ、大東文化大
学卒。
良馬さん：1975年生まれ、和光大学卒。
共に伝統的工芸品展入選、日本民芸館展入
選など。
右の写真が信州紬伝統工芸士の認定証



伝統工芸を引く継ぐのが

私たち姉弟の使命

小岩井カリナさん

小岩井 良馬さん

(弟)(姉)

(信州紬伝統工芸士)

400年前に遡る

上田紬のルーツ

Q 最初に上田紬の歴史と紬に
ついての説明をお願いします。

良馬・真田昌幸が400年程前に上田城を築城しましたが、その折に真田家が上田の地場産業として麻を素材とした「真田織」を奨励したことが始まりで、その後、生糸を素材とする「上田紬」に発展したと言われています。江戸時代中期には大島紬、結城紬とともに3大紬の一つとして名を馳せるようになりまして。この家の祖先は、真田家と共に武田家の家臣でした。しかし、武田家が長篠の戦いで滅ぼされたために、上田で武士から商人に転じ、江戸時代中後期からは蚕糸の仕事に携わり、戦後になって私たちの祖母が織りが好きだったという事もあり織元として創業しました。

生糸と紬の違いですが、生糸は繭をお湯につけて引いた糸です。1つの繭から1200mほど取れると言われていています。糸糸というのは、元来は糸が引けなく繭などを真綿にして、そこから紡いだ節のある糸をいいます。そもそも繭が始まったのは江戸時代ですが、江戸時代は繭から直接引いた上質な絹糸は、殿様とか武士とかの上流階級にしか許されてなかったんです。そこで幕府が、屑繭や出がら繭、あるいは汚れた繭からできる真綿から取り出す糸系だったら庶民も着て良いという許可が出て、紬織

物が江戸や京都などの都で爆

発的に栄えたわけです。だから、紬自体は庶民の着物という面は強いですね。ただ、現在は、紬自体は1回繭を真綿にして、それから紡ぐという手間をかけていますから、むしろ高価な織物になっていきます。昔は普段着だったのが、今はオシャレ着という位置づけです。

Q お2人が上田紬を継承された理由をお聞かせ下さい。

カリナ・私が育った昭和40年代は景気が上向きの時で工房の仕事も忙しかったです。前進座の中村梅之助さん、杉村春子さん、千代の富士閣なども工房にお見えになりました。お客さんもひっきりなしに来ていて、父母や祖父母も忙しくて、遊びに連れてってもらうことも少なかったんです。そんななかで祖母が2か月に1度市民会館にお芝居を観に連れていってくれました。お芝居の舞台で照明を浴びている向こう側に行ってみたいという気持ちが強く、大学を卒業して前進座の養成所に入り、6年程舞台俳優としてやってきました。

その中で知らず知らずのうちに着物の所作とか、立ち居振る舞いを身につけることができましたが、劇団での自分の立ち位置が見えてきて、もうやり切ったのかもしれないと思います。30歳の時に1人になって自分の生き方を考えてみようというアイランドに留学

海外に出て気づいた 日本文化の魅力

Q お2人が海外志向が強かったのは、長期間の滞在ができる労働ビザで海外に行くことにしました。働きながら外国で暮らすことを考えていたので、仕事をするとという条件に合う国を探したらドイツが1番だったので、ドイツの日本食レストランで雇ってもらいました。働きながら3年程暮らしました。当時は家業への興味は全くありませんでした。しかし、姉と同様ですが、海外から日本の様々な文化や伝統を見ると今まで意識すらしなかった価値や魅力があることに気づくようになりました。しかも、実家は上田紬の工房でしたから、それを途絶えさせてはいけないという思いが強くなり、日本に帰って紬の仕事に決意をしたわけです。

リンゴ樹皮をつかう

染色は独自の技術

Q 織物までの工程、流れはどのようなものですか？

良馬・昔は糸作りからやっていましたが、今は染色から始めています。染色は殆ど私と父がやっています。特徴的にやっているのはリンゴ染色です。2月〜3月ぐらいの選定の時期にリンゴ農家さんから直径20cmほどの木をいただいてきて鉋で削り、フレッシュな樹皮を1度乾燥し、その後、染色の工程に移ります。水に入れると樹液が出てきて、沸騰させていくとさらに色が出てきて、それで染液を抽出し、そこに糸を入れると染まります。

りんご染めは品種によって染まる色合いが変わってきます。長野県独自の林檎ブランド、秋映・シナノゴールド・シナノスイートもそれぞれが個性的な優しい色合いに染まります。

カリナ・染色した糸に糊張りして、乾かした糸を整経(せいけい)という工程で経糸(たいてい)の柄を作っていきます。私たちが織る時は緯糸(よこいと)で糸を重ねていって地層のようにだんだん縞とかグラデーションができ、その重なった経糸が縦のラインになっていくんです。その経糸を作って、今度はそれを機巻きに巻き付けて、織機にセットします。経糸は着物ですと1210本使っています。織り終わったら糸とこれから織

【2面に続く】